

専門高校と大学との接続について —特に水産高校に注目して—

川下 新次郎*

The Articulation of Special High School and College

Shinjiro Kawashita*

(Received August 31, 2001)

The relationship between secondary education and higher education is being changed by the popularization of the latter. That is, from one-sided relation, the former is a preparatory course for the latter, to cooperative relation. Especially, this is important for the vocational high schools. The number of college-minded students there is increasing lately, but these schools lay stress on special or practical study. So, this is handicap to them when they take the entrance examination which mainly consists of academic subjects. Therefore, to partner colleges with schools is asked for.

Key words: Articulation of schools and colleges, Vocational High School, Fishery High School

はじめに

中等教育さらには高等教育の大衆化に伴い、両教育の接続が問題となる。すなわち、中等教育がその普及に伴い、大学進学準備教育という伝統的・エリート的な教育の場から、さまざまな能力、進路希望を有する入学者への対応のため多様化したそれへと変化する。この変化が次に高等教育においても現れ、後者で必要とされる学力を一方的に前者に求めるような、かつての両者の予科的関係が再考をせまられている。

わが国でも、近年この問題を正面から取り上げたものとして、1999年（平成11年）12月に出された中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」がある。同答申は、まず、戦後半世紀にわたる教育の量的拡大を振り返り、現在における初等中等教育と高等教育の各々の役割を明示し、その上で、両教育の連携の在り方、入学者選抜の改善および学校教育と職業生活との接続について具体的な改善方策を提言している。すなわち、初等中等教育では、基礎・基本の確実な学習得を図り、「自ら学び、自ら考える力」などの「生きる力」を育成すること、高等教育では、「課題探求能力」の育成および専門的素養を持つ人材の養成をそれぞれの役割としている。そしてこれらの役割を前提として、連携の在り方については、入学者選抜だけでなく、教育目標・内容・方法などを含む全体的な接続を考え、大学が求める学生像や教育内容等をマルチメディアを通じて周知すること、高校生が大学レベルの教育を履修する機会を拡大すること、高校関係者と大学関係者による「連携協議会」を実施すること、などがあげられている。また、入学者選抜については、少子化や大学進学率の上昇による「大学全入時代」到来にむけて、選抜の基本理念が「大学が

* Division of International and Interdisciplinary Studies, Tokyo University of Fisheries, 5-7, Konan 4-chome, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京水産大学共通講座).

「学生を選抜する」ことから「大学と学生が相互に選択する」という考え方方に転換しつつあるとし、各大学がアドミッション・ポリシーを受験生に明示し、受験生はそれを踏まえ大学の教育理念、特色等に応じ選択することの必要を提言している。さらに、職業生活との接続については、在学中のインターンシップや企業経験者によるキャリア・アドバイザーの配置など主体的進路選択に寄与しうるキャリア教育の実施、社会人の再教育の場として大学の受入体制の拡充などがあげられている。

しかし、こうした議論は、主に普通科高校を念頭にして行われがちである。それは専門学科の高校が職業準備教育の場として主にとらえられていたからであるが、近年は後に見るように、進学希望者が増えており、それへの対応に迫られ、また行政側でもこの点への配慮が見られる。

例えば、専門高校と大学との接続について、文部省（当時）の職業教育の活性化方策に関する調査研究会議（座長・有馬朗人理化学研究所理事長）の1995年（平成7年）3月に出された「スペシャリストへの道」と題する報告書の中では、生涯学習時代をにらんで、職業高校の役割を完成教育の場としてよりもスペシャリストとして必要な専門性の基礎・基本を養う場としてとらえた上で（職業高校から専門高校への改称）その専門性を高める継続教育の場として大学に注目し、大学入試における専門高校卒業生に対する推薦入学の拡大や帰国子女特別選抜と同趣旨の特別選抜制度（学力検査の免除や軽減、小論文・面接などによる選抜）の導入、専門高校で取得した資格の重視や職業科目の出題などの工夫を提言している。

また、同省の理科教育および産業教育審議会（会長・木村孟学位授与機構長）が、1998年（平成10年）7月にまとめた答申「今後の専門高校における教育の在り方等について」の中でも、大学の入学者選抜における推薦入学や専門高校卒業生選抜の一層の拡大、補習教育の実施や専門高校での学習成果を踏まえたカリキュラムの工夫などの配慮の必要を提言している。

本稿では、高校と大学の接続に関するこうした近年の諸提言の意義を、専門高校、特に水産高校の状況をみることで、考えてみたい。

1. 専門高校における進学状況

前述したように、わが国においても高等教育の大衆化が進行している。わが国の大学・短大への進学率（浪人を含む）は、1976年（昭和51年）に38.6%に達し、最初のピークを迎える。80年代には横ばいの状況が続くが、90年代に入り再び上昇して、現在（2000年）49.1%にまで達している。また、1976年に創設された専修学校（専門課程）への進学率も、8.6%（1980年）15.8%（1990年）17.2%（2000年）と着実に伸びており、中等後の継続教育機関としての役割を果している。こうした高学歴化は、学卒者の就職先にも影響を与え、同じ職業に対してより高い学歴を要するいわゆる「学歴インフレ」を引き起こしている。

このような状況の中で、専門高校卒業生の大学等への進学率も、10.7%（1980年）10.0%（1990年）14.4%（1995年）21.6%（2000年）と、数値は若干低いが、高校全体の高等教育への進学率とほぼ同様な傾向で上昇している。こうして、先の「スペシャリストへの道」でも指摘されたように、かつて完成教育を目標とした職業高校は、進学準備教育にも対応できる専門高校への転換を求められている。

2. 水産高校における進学状況

水産高校は、表1および表2に見られるように、専門学科の中では、現在（2000年）農業科に次いで大学等（大学・短大・専攻科）への進学率は低いが、それでも近年少しづつ増えてきている。

これら以外の進学先では、専門学校（専修学校の専門課程）への進学者が増えているが、水産関係が少ないために、専門に直結しないという問題がある。また、看護科と並んで比較的多く設置されてきた水産科の専攻科への進学も多いが、そのほとんどが漁業、機関、通信技術（無線）のいずれかの学科で、それ以外は大学進学によるしか専門性を生かせない状況にある。ただし、それには、後述するように、多くの困難が伴うため、結果的に専門とは直接関連しない進学先を選択するものが少なくない（表3の長崎水産高校および後述の京都府立海洋高校の例、表5参照）。

専門高校と大学との接続について

表1. 学科別進学率(2000年現在)

	普通	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	その他	総合
大学等	53.3	11.1	14.7	19.4	11.5	20.4	42.1	60.5	29.6
専門学校	16.3	19.2	17.7	22.1	14.4	23.0	38.4	10.9	26.8

(出所)『文部統計要覧』(文部省、平成13年版)より作成

表2. 水産高校卒業者の進学率の推移(1991年~2000年)

	91	92	93	94	95	96	97	98	99	2000
大学等	8.0	7.7	8.7	8.8	10.7	10.0	10.5	9.6	12.0	11.5
専門学校	5.6	5.2	6.8	8.4	9.2	9.7	11.6	11.2	12.3	14.4

(出所)『文部統計要覧』(文部省、平成3年版~13年版)より作成

表3. 長崎県立長崎水産高校の進学状況(平成4年度から最近6カ年)(注1)

卒業年度		H4	H5	H6	H7	H8	H9
卒業者数		195	202	192	165	144	146
関連	4大(校)	3	1	2	3	1	4
	短大(校)	1	2	1	1	1	2
	専攻科	9	13	12	6	9	9
	専修学校等	11	7	10	6	8	4
非関連	4大(校)	0	0	0	0	1	1
	短大(校)	2	0	3	3	1	1
	専修学校等	7	11	10	9	8	14

3. 水産高校と大学進学

3-1. 大学進学における問題点

前述したように、水産科教育の専門性を生かす道として、大学進学は重要な手段であるが、そこには大きな障害がある。まず、カリキュラムが専門科目中心で進学に対応していないことがある。専門高校の場合、卒業に必要な単位80単位(78年改訂以前は85単位、2002年度より74単位)のうち30単位(78年改訂以前は35単位、2002年度より25単位)以上は専門科目に当ることになっている。例えば、前掲の長崎水産高校では、表4のようなカリキュラムが組まれている(注2)。

したがって、普通教科を中心とするセンター入試受験は、学校、受験生双方に過重な負担となる。しかも、高校進学において、普通教科を苦手とする生徒が専門高校に振り分けられる状況があり、その負担を一層重いものにしている。さらに、水産系の大学、学部が少ないことがこれに拍車をかけている。しかし、こ

表4. 教育課程表（平成10年度）

	海洋科	食品流通科	水産増殖科	機関科	情報通信科
普通科目計	4 6	4 6	4 6	4 7	4 9
職業科目計	4 4	4 4	4 4	4 3	4 1
特別活動	6	6	6	6	6

うした言わば逆境の中にあっても、進学を希望する者があり、彼らの専門知識、関心を生かして進学できる手立てが求められる。そこで、先の職業教育の活性化方策に関する調査研究会議や理科教育および産業教育審議会の提言にみられるような、専門学科卒業生を対象とする特別選抜入試が求められることになる。

3-2. 進学への取組み

先述したように、水産高校のカリキュラムは、現状においては、大学・短大への進学において不利であるため、各学校において、さまざまな対策が講じられている。その多くは、進学希望者がまだ少数であることから、進学コースの設置や習熟度別学習といった教育内容・方法における組織的対応が困難な状況にあり、普通科目の選択科目の設置、同科目の時数の増加等とともに補習授業の形で個別に対応することになる。例えば、京都府立海洋高校の例で見ると（注3）3年次に選択科目として「数学II」（3単位）と「英語II」（3単位）を開講し、進学希望者に対応している。しかし、それだけでは不十分との判断から、次のような取組みも併行させている。

進学補習

進路指導部が主体になり、英語と数学の教員に依頼して週1回ずつ進学のための補習を行っている。推薦入試であってもセンター試験の受験を必須とする学校があり、また、入学後に英語や数学を学ぶのであるから、センター試験の問題が解けることを目標として行っている。

学習合宿および夏期補習

学習合宿は、進路指導部が主体となり、夏休みと冬休みに2泊3日で近くの公共施設（山の家等）で行っている。参加生徒は数名であるが、センター試験の問題集等を使用して、自習形式で行っている。具体的に進学先を決めている生徒に対しては、進学希望先の過去の入試問題にチャレンジさせている。指導は、国語、社会、数学、理科、英語の教員が当たっている。また、夏期補習は、上記5科目について、学習合宿終了後7日間にわたって学校内で実施している。

小論文指導

小論文については、補習の曜日・時間を設定せずに、受講希望者が直接国語の教員の指導を受けている。

個別指導

直接学習指導をするのではないが、進路指導部の進学担当者が適宜面談して、意欲の喚起や学習計画立案等の指導を行っている。また、1年生の時から担任や学科でも対応して、希望が現実のものとなるようファローをしている。

なお、同校の卒業生の進路状況は表5のとおりである（注4）。

このようにして進学者を増やすことは、水産高校への入学者対策としても重要なものとなる。例えば、福井県立小浜水産高校の長沢正明教諭は、中学生や父兄、地域住民に水産高校を魅力ある学校として認めてもらうための条件として、次の点に注目している（注5）。

学習の形態（教科の種類・内容が豊富であること。選択の自由度が高い教育課程であること。）

資格（社会的に認知された資格が多数取得できること。）

専門高校と大学との接続について

表5. 京都府立海洋高校の進路状況（平成4年度から最近6ヵ年）

卒業年度		H4	H5	H6	H7	H8	H9
卒業生徒数		108	110	120	115	113	108
関連	4大（校）	3	3	3	6	5	1
	短大（校）	0	0	1	1	1	1
	専修学校等	11	11	14	7	18	14
	就職	64	50	53	48	25	25
非関連	4大（校）	1	0	1	0	1	1
	短大（校）	0	0	0	1	2	2
	専修学校等	5	10	17	21	19	21
	就職	24	36	31	31	38	33
その他		0	0	0	0	4	10
関連大学名		東海 日本 日体	高知 三重 福井県	高知 東水 三重 長崎 福井県 三重 福井県 鹿屋体	高知 東海 長崎 福井県 東水 日本	長崎 長崎 福井県 東水 日本	長崎

進路（進路の選択が多様であること。社会的に評価が高い進学、就職先が多いこと。）

学校の施設、設備（施設、設備が整備され充実していること。）

部活動（部活動が盛んで、全国でも通用する部があること。）

日常の学校生活（学ぶことが楽しい、充実していると感じること。教職員が生徒のことを常に気にかけており、親身であること。生徒一人一人の個性が尊重される場であること。地域的に評価が高いこと。教師が進取の姿勢を持続していること。）

この中では、 、 、 に関わって進学教育およびその成果が、水産高校の魅力向上に寄与することとなる。

4. 大学の対応

こうした専門高校（水産高校）の取組みに対し、大学はどのように対応しているだろうか。ここでは、本学（東京水産大学）での対策を取り上げてみたい。

表6. 平成14年度推薦入学募集人員

学部・学科名	募集人員		
	推薦A	推薦B	
水産学部	海洋環境学科	5名	—
	海洋生産学科	10名	5名(1名)
	資源育成学科	10名	—
	食品生産学科	10名	1名(1名)
合計		35名	6名(2名)

注: ()は水産教員養成課程の募集人員で、内数。

(出所) 東京水産大学「平成14年度 学生募集要項」

4-1. 入試対策

本学では、特別選抜の一環として、推薦入学を実施している。当初、水産系高校出身者の特別枠は設けられていなかったが、1997年(平成9年)より、推薦A(公募制)と推薦B(水産系高等学校指定制)に分けて実施されている(表6参照)。

本稿との関係では、推薦Bが注目されるが、同推薦による選抜は、大学入試センター試験および個別学力検査を免除し、小論文および面接により行われており、指定校制と併せて、冒頭に述べた専門高校と大学との接続に関する近年の諸提言に沿った対応がとられている。

4-2. 入学後の取組み 補習教育

前にみたように、専門高校では普通科校に比べ、普通教科の授業時間数が少ないため、入試のみならず、入学後の学習においても不利となる場合がある。そのため入学後の補習教育が求められることになる。そこで、ここでは特に、推薦Bにおいて現在最大5名の人員枠を設定している海洋生産学科の補習教育の取組みに注目したい。

平成13年度の例でみると、同学科では、年度始めに、主な補習教科である自然科学基礎科目(数学、物理、生物、化学)得意とする5名の大学院生(修士1年生2名、修士2年生3名、内、女子学生への対応のため女性各1名を含む)をチューターとして指名し、水産高校出身入学生を対象に、次のような対応を依頼している(注6)。

毎週月曜日、昼休みおよびその後の時間を利用したランチタイム・ミーティングを開き、履修相談・学習相談(科目選定、講義の受け方、試験の受け方等)、自然科学基礎科目の補習、前期試験対策などを行う。

実際、水産高校出身入学者の中で、「高校では一般科の授業が少なかったため、普通高校出身者よりも一般科目に弱いのではないかと、入学後、特に1年次の時、とても不安だった。1年次の前期試験がうまくいけば、少し楽になる。前期試験が一つの山。」との意見がみられる。また、ミーティングにより、「普通高校出身者も同じように感じていることがわかって、少し気分が楽になったように思う。」とも述べられている。チューターも、「授業内容は高校で習っていないものが多く、普通高校出身者も同じように難しいと感じている。自分で水産高校出身だから苦手なのだと、思い込んでしまっているのではないだろうか。授業に対する感じ方は普通高校出身者も同じなので、水産高校出身ということを弱点と思わないでほしい。むしろ、

専門高校と大学との接続について

2 年次以降で多くなる専門科目については、水産高校出身者の方が基礎知識を持っていて、普通高校出身者よりも理解がはやいと考えられるので、もっと自信を持ってほしい。」とアドバイスしている。

これらの報告からは、補習教育が一定の実をあげていることがうかがえると同時に、その対策が普通科高校出身者にも必要なものであることが暗示されており、中等教育と高等教育の接続に関わる問題の所在の広がりを示すものとなっている。

おわりに

以上見てきたように、専門高校（水産高校）においては、進学のためには厳しい状況の中で、生徒の希望に応えるべく、大学との接続を求めて、さまざまな指導がなされている。その配慮は、入学前の生徒にも及び、冒頭に紹介した中教審答申のいう、入学者選抜だけでなく、教育目標・内容・方法等を含む「全体的接続」をめざすものといえよう。

このような中等教育における試みに対して、高等教育、その主要な場である大学においても、特別選抜や補習教育が実施されているが、特に後者の場合、高校同様、その対象者が現状においては少数であるため、組織的な対応が困難な状態にあり、関係者のボランティアに頼らざるを得ない局面がある。しかし、補習教育のところで言及したように、これらは、専門高校に限定されない広く中等教育と高等教育との接続に関わる重要な課題となりつつあり、今後、より包括的な対応が求められる。

注

- 1) 松崎民雄：専門性を高める教育機関（大学・専攻科等）への進学希望者の拡大と実現に向けた取り組みはどのようにあればよいか。全国高等学校水産教育研究会、研究彙報、38, 73-74 (1999) より作成。
- 2) 松崎民雄：前掲論文、79 より作成。
- 3) 狩野清貴：専門性を高める教育機関（大学・専攻科等）への進学希望者の拡大と実現に向けた取り組みはどのようにあればよいか。前掲誌、62。
- 4) 狩野清貴：前掲論文、61 より作成。
- 5) 長沢正明：専門性を高める教育機関（大学・専攻科等）への進学希望者の拡大と実現に向けた取り組みはどのようにあればよいか。前掲誌、46-47。
- 6) 以下、東京水産大学海洋生産学科主催「水産高校出身者学生への補習教育充実に関する懇談会」（平成13年3月7日）配布資料による。

専門高校と大学との接続について —特に水産高校に注目して—

川下 新次郎

（東京水産大学共通講座）

高等教育の大衆化とともに、中等教育との接続関係の再考が求められている。すなわち、入試に象徴される大学で必要な学力を一方的に要求する旧来の予科的関係から、多様な学校の実情および進学希望者の実態にも配慮した双方向的な関係が求められる。特に、そのカリキュラムが専門教科に重点を置いていることから、普通教科を中心とする入学試験では不利となる専門高校（職業高校）の生徒に対処するため、専門家の養成という共通の目標の下、連携の必要が高まっている。

キーワード：中等教育と高等教育の接続、専門高校、水産高校